

N
I
E

実 践 報 告 書

2019(令和元)年度



Newspaper in Education

群馬県N I E推進協議会

NIE 実践報告書

2019(令和元)年度



Newspaper in Education

群馬県N I E推進協議会

Contents

ごあいさつ	群馬県 NIE 推進協議会会長 森 谷 健	
児童と「新聞」との関わりを強くする ～新聞への「投稿」と新聞記者による「出前授業」を通して～ 館林市立第八小学校.....		6
ものの見方や考え方を広げる機会に出会うために —新聞に親しみ、活用する実践— 高崎市立第一中学校.....		10
新聞を用いた幅広い「ものの見方」を育てる取り組み ぐんま国際アカデミー中高等部.....		14
NIE における本校の取り組み 群馬県立吉井高等学校.....		18
「目的意識をもち、自分の考えを表現できる児童の育成」 —新聞社への投句・意見文の投稿を通して— 沼田市立利南東小学校.....		22
ものの見方や考え方を深め、思いや考えを伝え合う生徒の育成 —NIE 2 年目の取り組み— 高崎市立大類中学校.....		26
新聞記事を読み、自分の感想や意見を書いたり、 発表したりできる生徒の育成 沼田市立薄根中学校.....		30
親しみをもって新聞に接することができる環境づくり ～校内への NIE 実践の普及を通して～ 嬭恋村立嬭恋中学校.....		34
NIE 令和元年度の実践 群馬県立伊勢崎高等学校.....		38



ご あ い さ つ

群馬県NIE推進協議会会長 **森 谷 健**
(群馬大学社会情報学部教授)

群馬県NIE推進協議会では、今年度も活発な事業が展開されました。関係者皆様のご尽力の賜物と、感謝を申し上げます。

2019年度は、実践指定校として、小学校2校、中学校4校、中等教育学校1校、高等学校2校の合計9校で熱心な取り組みをしていただきました。小学校から高等学校まで、それぞれの発達段階に応じて、また新聞の配置場所・配置方法にも工夫をしていただき、さまざまな教科で実践が行われました。ご協力いただいた児童・生徒の皆さんと教諭の皆様、ありがとうございます。また、ご協力をいただいた関係新聞各社に御礼を申し上げます。

児童・生徒のいきいきとした学習の様子や自信に満ちた成果発表の様子、また、今までになかった新たな展開、これらの詳細については本報告書に掲載されておりますので、ぜひお読みいただければと思います。

さらに、今年度もまた、小学校、中学校、高等学校だけではなく、大学や社会教育、企業などで、あらためて新聞を知っていただく機会を多く持つことができました。

また、2019年度の「NIE全国大会」は、「深い対話を育むNIE」をスローガンに、2019年8月1日（木）、2日（金）の両日にわたり栃木県宇都宮市の宇都宮市文化会館や宇都宮市総合コミュニティセンターを中心に開催されました。県内からはNIEアドバイザーの先生方4名の方にご参加をいただきました。

近年、子どもたちの学力について議論されています。学力をいくつかのカテゴリに分ける試みもあります。仮にそれらを「知識・技能」「思考力・表現力」「学びに向かう力」とするなら、NIEは、それらのすべてを育む力を持っていると言えると思います。そして、NIEのもつその力は、児童・生徒だけでなく、大学生や社会人についても言えることだろうと思います。そのような意味において、本協議会の活動がさらに充実することが期待されるところです。

児童と「新聞」との関わりを強くする

～新聞への「投稿」と新聞記者による「出前授業」を通して～

館林市立第八小学校

北村

聡

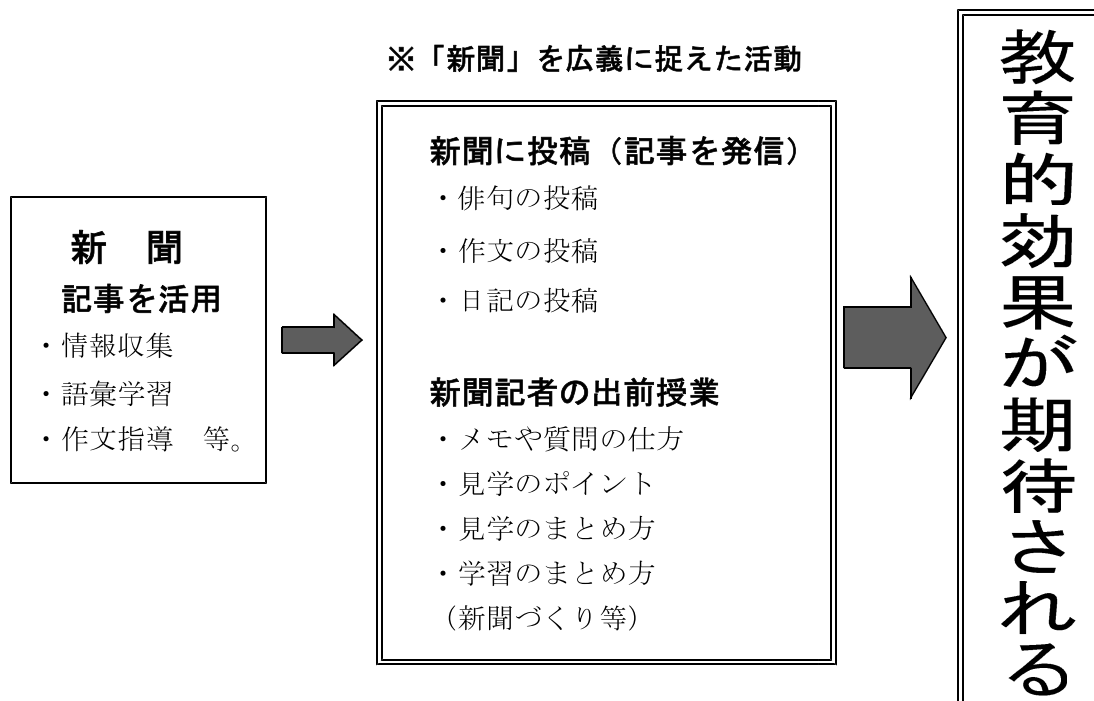
1 はじめに

本校は、群馬県の東部、館林市の西方に位置し、周辺には県内唯一の白鳥飛来地である多々良沼や松林、県立館林美術館などがある。児童数504人、21学級の小学校である。子どもたちの学習をより充実させるため、本年度より、新規NIE実践指定校になり取り組んできた。

2 実践の概要

NIEの可能性を切り開くため、「新聞」を広義に捉え、「新聞」を核とした様々な関わりについて、新たな取り組みを試みてきた。例えば、新聞記事を活用するだけでなく、投稿などの形で発信していくことで、子どもたちと新聞との関わりを強くしようと考え、実践を重ねた。また、子どもたちの学習をより充実させるため、群馬県の地方紙「上毛新聞」の記者を招いて「出前授業」を実施し、子どもたちが、社会科見学の前に取材の仕方等を学べるよう事前学習を充実させた。(図1)

(図1) NIEの考え方



3 新聞の置き場所と整理の方法

(1) 新聞コーナーの設置

児童の往来が頻繁な職員室前の廊下に、新聞コーナーを設置した。教室で使う児童用のロッカーを活用して、整理している。(写真1)

NIEについて、情報を発信するため、新聞記事等を壁に掲示している。(写真2)



(写真1) 児童用ロッカーの活用



(写真2) NIEコーナー

(2) 新聞の整理

自由に新聞を活用できるようにするため、「新聞貸し出し簿」を用意し、教職員や児童が自由に新聞を借りられるようにした。(写真3、4)

月 日	クラス	新聞名	教科
9月11日	6-3	上毛 朝日 毎日 産経 小学生	国語
10月3日	6-1	上毛 朝日 毎日 産経 小学生	国語
11月12日	5年	上毛 朝日 毎日 産経 小学生	国語
12月3日	通校	上毛 朝日 毎日 産経 小学生	自立
1月1日	6-5	上毛 朝日 毎日 産経 小学生	国語

(写真3) 新聞貸し出し簿



(写真4) 貸し出しの様子

また、図書室にも新聞を掲示し、多数の児童が自由に読めるようにしている。読み終わった新聞は、職員室前のロッカーに収納するようにしている。(写真5、6)



(写真5) 図書室の新聞コーナー

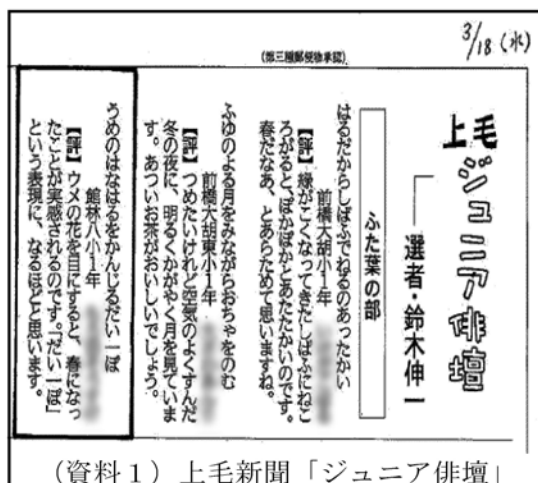


(写真6) 図書室の新聞コーナー

4 実践の内容

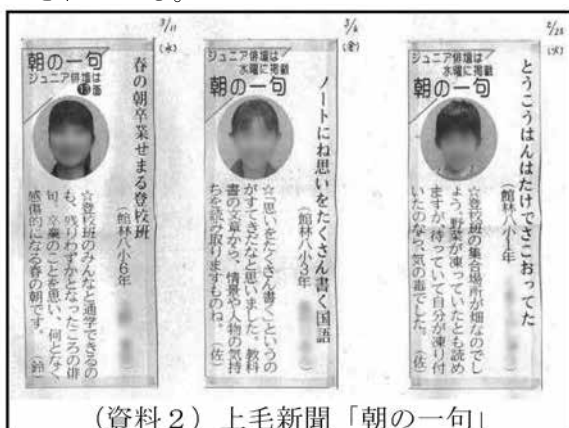
(1) 新聞に投稿（記事の発信）

本校では、「全校俳句作り」に取り組んでいる。校長自ら、全学級で俳句の授業を行っている。毎週金曜日に俳句用紙を配布し、提出は強制ではなく、子どもたちの自由意志である。提出された俳句は、校長が、すべて学校だより「たたらの子」に掲載し発行するとともに、上毛新聞「上毛ジュニア俳壇」（資料1）に投稿している。そこで選ばれた俳句は、上毛新聞「朝の一句」（資料2）に掲載されている。

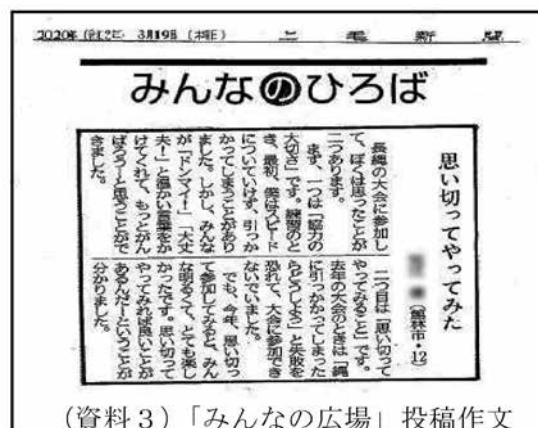


（資料1）上毛新聞「ジュニア俳壇」

また、各学級担任が学校行事や体験活動の後に、書かせた作文や日記等の中で、よく書けている作品を校長に提出することになっている。提出された作品は、校長が上毛新聞に投稿している。そこで選ばれた作品は、上毛新聞「みんなのひろば」（資料3）に掲載されている。



（資料2）上毛新聞「朝の一句」



（資料3）「みんなのひろば」投稿作文

(2) 新聞記者による「出前事業」

子どもたちの学習をより充実させるために、専門家の力を活用する「出前授業」を、積極的に取り入れている。5年生の社会科見学では、上毛新聞社とスバルの自動車工場を見学することになっている。見学に先立って見学先について豊富な取材資料などをもっている新聞記者を招き、見学のポイント、メモや質問の仕方、見学のまとめ方等の授業を行ってもらっている。（資料4）また、6年生の尾瀬学習においても、尾瀬の豊富な資料をもっている新聞記者を招き、尾瀬の見所、尾瀬の歩き方、学習のまとめ方等の授業を行ってもらっている。



（資料4）専門家による「出前授業」

(3) 新聞記事の活用

6年生国語で「どんな未来にしたいかを考え、テーマを決めよう」という授業を行った。情報収集の手段として、新聞を活用していた。

(写真7) 2時間続きの授業だったが、ほとんどの児童は、集中して新聞を読んでいた。授業後は「新聞を読んで楽しかった」という感想が、多く寄せられた。

通級教室では、記憶した漢字や数字を、新聞から探す活動をしていた。児童は、記憶した漢字を探すため、真剣に新聞を読んでいた。

(写真8) 3, 4年生の学習に応用できる可能性があると感じた。例えば、漢字の復習で、教師があらかじめ新聞の中から習った漢字を見つけて印刷し、クイズのようにして探させると、意欲的に取り組めそうだった。

3年生の男子児童は、自主学習として、新聞のスクラップを行っていた。(写真9) 毎日ではないが、興味のある記事を発見したとき、ノートに貼って感想を書いていた。



(写真7) 6年生国語の授業



(写真8) 漢字探し



(写真9) 自主学習のスクラップ新聞

5 実践の感想と今後の課題

N I Eの可能性を切り開くため、「新聞」を広義に捉え、「投稿」と「出前授業」を重点的に実践してきた。その結果、様々な教育的効果が認められた。自分の書いた俳句や作文、日記等が、新聞に掲載されることで、子どもたちの自信につながり、自己肯定感を高める結果となった。また、親子の会話のきっかけ作りにもなり、家族の絆を深める効果も期待される。新聞に掲載されることで、子どもたちは、新聞を身近な存在と感じるようになり、新聞との関わりが自然と深められ、さらに、親や親戚に褒められることで、子どもたちの執筆意欲も高められていくといった効果もある。

また、新聞記者の「出前授業」のおかげで、社会科見学や尾瀬学習が充実したのはもちろんのこと、見学や学習後のまとめも、大変充実したものとなり、教育的効果も認められた。

今後の課題は、子どもたちと「新聞」との関わりを強くするような活動を通して、子どもたちの学習をより充実させる手段として、N I Eを効果的に活用していくとともに、今後も、効果的な活用の方法について可能性を切り開いていくことである。

ものの見方や考え方を広げる機会に出会うために

－新聞に親しみ、活用する実践－

高崎市立第一中学校

報告者

小林 久美子

1. はじめに 実践の概要

1～3学年が各3クラス、特別支援学級が3クラス、計 12 クラス、生徒数 278 名、職員数 42 名の本校は、中核市高崎市のほぼ中心に位置し、歴史を紐解けばこの地での開校（県立中学校）は、1898 年に遡る。新制中学校となってからは 68 年、市内では「伝統ある学校」として周知されている。また、長年熱心な図書館指導員のもと、「学習・情報センター」機能としての図書館教育と読書推進の充実が伝統的、継続的に育まれてきている土壌がある。一方、例に漏れず新聞を購読している家庭の減少には歯止めがかからず、生徒の過半数は世の中の情勢を知り得る方法をネットに依存しており、上質の文章から得られる想像力や情報の正誤への判断力の低下が心配される実情が厳然としてある。

さて、本校の今年度の校内研修のテーマは「生徒の主体性がより高まる指導のあり方」である。2 年ぶりに N I E 実践の指定を受け、新聞の活用を推進する機会に恵まれたことで、生徒が自らの興味関心に対しての疑問解決の手立てとして、新聞の存在を意識する環境づくりにつなげてきた。

2. 実践の実践

（1）購読計画と整理方法

i. 購読計画

9 月 1 日～12 月 27 日 朝日新聞・読賣新聞・毎日新聞・産経新聞・上毛新聞

10 月 1 日～1 月 31 日 日本経済新聞

12 月 1 日～3 月 31 日 東京新聞

日経の購読時期は、3 学年の指導計画（公民）との関連で設定した。

2020 年が東京オリンピックの予定の年だったことから東京新聞の購読月を定めた。

ii. 置き場所と整理方法

①配達場所		職員玄関前のポスト下に、N I E 専用かごを設置。北側で風が吹き込むため、かごの下に重りを取り付けた。
②当日の新聞（最新版）		3 階（2 学年教室の階）図書館前の廊下に長机を設置し、朝日・読賣・毎日を平置きした。 2 階廊下（3 学年教室の階）に長机を設置し、産経・日経・上毛・東京を平置きした。 但し、2 学年の東京校外学習の前後（11 月）は、東京新聞を 3 階に配置した。 いずれも新聞クリップを使用し、通りかかった生徒や教員が随時新聞を手にとって広げられるようにしておいた。
③昨日の新聞		図書館の新聞ラックに設置し、「子ども新聞」や話題性の高い記事、関連図書のある記事等を書見台に展示した。
④一昨日以前の新聞		図書館に銘柄毎に 1 か月間保管した。
⑤④より以前の新聞		空き教室のロッカーに銘柄ごとに保管した。



（２）給食時の放送

給食の時間に放送委員が全校放送で新聞記事を紹介し、感想を述べている。採用した記事は、職員室前の廊下に掲示される。

（３）行事の振り返り

２学年は「東京校外学習」のまとめ、３学年は「修学旅行」のまとめを、個人個人がＢ４版の新聞にまとめ、廊下に掲示した。



（４）国語科における実践

① ２・３学年：名文に触れ、語彙を増やす

授業の始まりの５分間、「天声人語書き写しノート」に取り組む。天声人語の切り抜きは、教師が事前に数日分渡しておく。書き写しの目的を年度初めに知らせ、筆記用具は鉛筆を使用し、辞書の使用を奨励する。

② ２学年：新聞の投書記事を書く

身近な話題を探し、自分の考えを１３０字程度で書き、推敲し、上毛新聞の「U22 私の声」に投書した。投じた者は全て掲載された。記事は授業、クラス、学年で紹介するとともに、階段の壁面に掲示した。この取り組みは先年度より指導計画に位置づけてあり、生徒間に「２年生は新聞に投書する」という意識が根付きつつある。

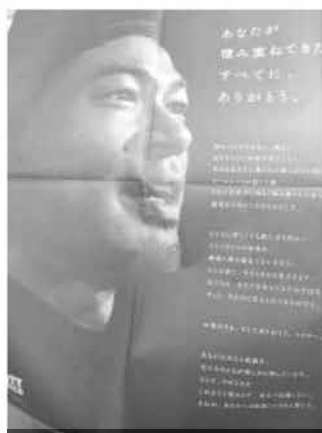
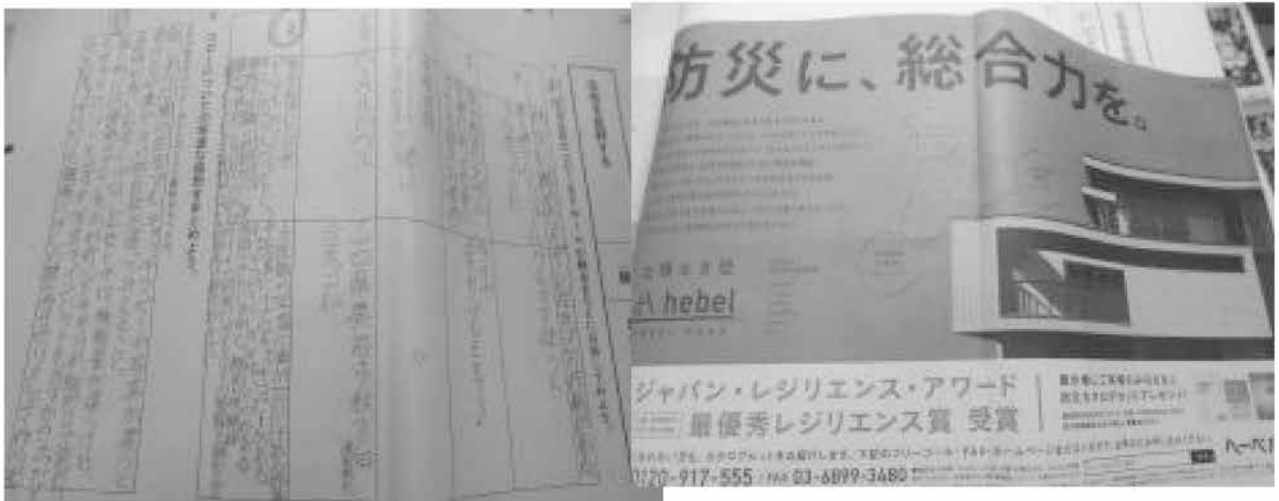


③ 2 学年・3 学年

新聞の書き方、レイアウト、見出しの付け方等について、上毛新聞の出前授業の資料を参考にし、先述の（３）行事の振り返りと連携させて、指導した。

④ 3 学年 1 学期：広告を批評する（2 時間扱い）

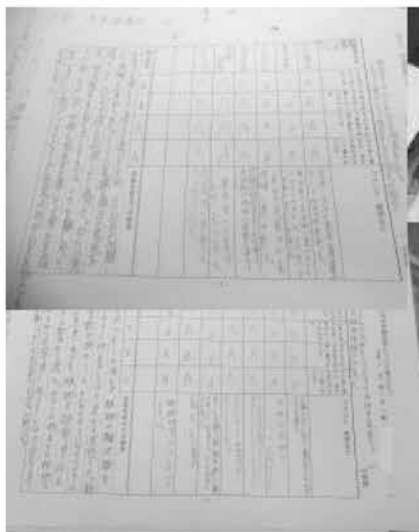
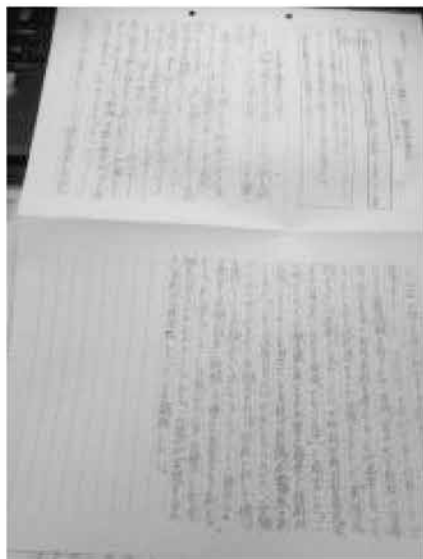
新聞の中の広告の中から、興味をひかれたものを切り抜き、その効果について考える授業を行った。レイアウトやキャッチコピーからどんなことが読み取れるかを考え、効果的な表現について意見を交換することができた。



⑤ 3 学年 2 学期：社会で起きている問題について、解決策を考える（4 時間扱い）

生徒は、新聞記事の中から「持続可能な世界」を実現するための課題を見つけ、それを自分自身の課題として捉え、論じようとすることができた。長文を書くことはやや困難な学習課題であったにもかかわらず、多くの生徒が意欲的に取り組み、「少し難しいことを

考えることの喜び」を味わえた授業となった。



(5) 社会科における実践

3 学年公民分野の「国会・内閣・裁判所」の授業において、新聞記事を取り込んだ映像を資料として提供したり、生徒に調べ学習をさせた。また、10 月に消費税が 10 %になった際には、複数の新聞を読み比べ、マスメディアから発信される様々な角度からの切り口を、批判的に読み取る活動に取り組ませた。

(6) その他



職員室前の廊下や図書館の常設掲示板に、コルクボードを設置したり、キャッチコピーをデコレーションしたりして、部活動や各種コンクール等、本校の生徒が取り上げられた新聞の記事やコピーを掲示してその活躍を知らせながら、「新聞に名前が載った」「新聞に写真が載った」喜びや、身近な人が取材を受けたことへの関心を高めた。また、これらの記事を共有することで愛校心が高められた。

3. 実践の感想と今後の課題

情報センターである図書館入り口前の廊下の机に新聞を平置きに展示することで、休み時間や朝、放課後等に生徒や教員が新聞を手にとって閲覧する光景が日常的となり、新聞そのものを身近に感じる生徒が増えてきていると思われる。

冒頭で述べたように、日常的に新聞を読む習慣がない生徒が増えている昨今だが、それだけに、授業の中で新聞を扱う場面は、かえって生徒達にとって新鮮さがあり、学習意欲が引き出された。また、新聞を広げたり切り取ったりするためには、通常教室の机より広いテーブルの方が利便性に長けていることから、いきおい、図書館を利用する授業が増え、このことが、図書や読書への関心に結び付き、図書の貸し出し冊数が伸びるという効果もあった。

今年度は、新聞の管理や整理を教職員で行ってきたが、来年度は、既に活発な図書委員会の活動内容に、NIE を取り組む試みを検討し、学びを広げ考えを深めていく生徒の育成に努めていきたい。

新聞を用いた幅広い「ものの見方」を育てる取り組み

ぐんま国際アカデミー中高等部

教諭

今井 信一
吉田 峻

首藤 律子
坂本 樹

1. 実践の概要

1. 1. 本校の教育の特徴

ぐんま国際アカデミーは小中高一貫のイメージョン教育を行っており、学年やコースにもよるが、半分以上の教科の授業で英語を教授言語としている。また、2012年より高等部の一部で国際バカロレアディプロマプログラム（DP）を提供している。また2019年度からすべての中等部生に対して国際バカロレアミドルイヤーズプログラム（MYP）の候補校として学習指導を行っている。

1. 2. 課題設定とその理由

MYP では重要概念として「ものの見方（Perspective）」を定めている。例えば、国語科における「ものの見方」は以下のように示されている。

私たちが状況、物、事実、考え、および意見を観察するときの立場です。ものの見方は、個人、グループ、文化、または学問領域と関連性をもつ場合があります。さまざまな異なるものの見方によって、しばしば複数の表現や解釈がもたらされます。

（国際バカロレア機構 「言語と文学」指導の手引きより）

また、社会科でも関連概念として「ものの見方」が示されている。

上記を踏まえ、本校では国語科と社会科において「さまざまな異なるものの見方」に気づかせ、指導をより効果的にするために新聞が有効であると考え、視野を広げるツールとして活用することとした。

1. 3. 実践の方針

上記の課題と学習指導要領を踏まえ、本年度は中学1年生（社会）、中学3年生（国語）、高校1年生（現代社会）で新聞を活用した指導を行う。また、本校の学校設置科目「国際バカロレア 国語探究（IB Language and Literature SL）」でも、使用テキストの1つとして新聞を活用する。その他の学年にも広げるために、新聞を図書館に置き生徒の目に触れる

よう工夫する。

（文責：今井）

2. 図書館における取り組み

指定校になる以前から本校では全国紙3紙、地方紙1紙、英字新聞1紙を購入しており、生徒は休み時間や各教科の調査探究の時間に使用することができる。生徒は当日分を閲覧台で読むことができ、閲覧台の下には当月分の新聞も保管されている。また閲覧台横の棚には常に2か月分の新聞を保管しており、適宜調査に用いることができる。書庫には2年分を保管している。

（文責：今井）



3. 授業における取り組み

3. 1. 中学1年生（MYP 社会科）での取り組み

中学校1年生では学習指導要領歴史的分野「2A 歴史との対話」の単元で新聞を用いた授業を行った。時代区分の意味や意義について扱う際に、平成の31年間を振り返り、平成を2つに分ける授業を構想した。

本授業では読売新聞の「読者が選んだ10大ニュース」を30年分用意し、教室壁面に掲示した。生徒は30年分の紙面から、平成を2つに分ける大きな出来事を紙面から読み取り、その出来事の前後で社会の仕組み・制度や、私たちの生活・考え方がどのように変化したかを考察した。

歴史の時代区分としては社会制度に着目した古代・近世といった区分や、政治の中心となった場所に着目した奈良時代や江戸時代といった区分、文化的側面に着目した縄文文化や元禄文化に沿った区分な

どが混在している。このように時代の区分は様々な方法で行うことができる点に気づけるよう、本授業では十分な資料を用意する必要があるため、新聞の情報は有益である。各新聞社が1年間の出来事をまとめ、それらを積み重ねて内容を閲覧できるよう工夫できた点で、新聞の活用は本単元で非常に意義深いものであったといえる。

生徒は各々で工夫して時代の変わり目を考察することができた。また、考えを発表する活動を通して、時代を区分するためにさまざまなものの見方があることを気づかせることができた。

このように、新聞は近現代史を学習するうえで非常に意義深い資料であり、また生徒の興味を引く教材であるといえる。(文責：今井)



3. 2. 中学校3年生 (MYP 国語科) での取り組み

中学校3年生では、同じトピックについて書かれ

た2つの記事を比較・対比するという実践を行った。新学習指導要領国語科「読むこと」の領域では、文章の内容や形式を批判的に読むことが目標の1つとしてあげられている(指導事項イ、ウ)。また、MYP「言語と文学」という教科においても同様に、文章に対する批判的な読みが求められる(評価目標 A・iv)。そこで、本実践では共通するトピックについて書かれた2つの文章を比較・対比することで、それぞれの文章がどのような「ものの見方」に基づいて書かれているのかについて評価することを目標とした。

この実践過程において新聞記事を用いた学習活動は2度ある。1度目は単元内の形成的評価のために、教科書(光村図書)に掲載されている新聞記事を比較する活動である。この活動では、「和食のユネスコ無形文化遺産決定」をトピックとした記事を、「筆者の主張」「文章構成」「語句選択の特徴」という観点から比較・対比した。2度目は、単元末の総括的評価(期末試験)において、同じトピックについて書かれた新聞記事を、形成的評価と同じような観点から比較・対比する活動である。その際は、「SDGs(持続可能な開発目標)」をトピックとした記事を、比較・対比するという課題を課した。

これらの活動を通して、生徒は同じ話題についても異なるものの見方が存在することを学んだ。期末試験で生徒が取り組んだ記事のトピックは、SDGsという世界規模の普遍的なゴールである。しかし、生徒は2つの記事を読むことで、世界共通のゴールであっても異なるアプローチの方法があることを学んだと考えられる。実際に、生徒は期末試験で2つの記事を比較・対比した際、2つの記事に見られる相違点として次のようなことをあげた。生徒によれば、1本目の記事はSDGs達成に向けて、政府や国際機関などの大規模な組織が行動することを前提としていた。一方で、2本目の記事ではSDGs達成に向けて、個人の行動を前提としていた。このように、世界規模で解決が目指される問題に対してでも、異なる解決の道筋があるということを、生徒は新聞記事の語句や、筆者の主張から学んだのである。

以上のように、共通する話題に対して新聞記事は異なる方法論や立場を提示することがあるため、生徒の「ものの見方」を育む教材として役立てられる。

(文責：坂本)

3. 3. 中学校 3 年生 (MYP 社会科) での取り組み

中学校 3 年生では、公民的分野「現代社会と私たちの生活」の単元で新聞を用いた授業を行った。この単元では、「視点によって公平さが変化し、不公平感が生じる」というテーマを設定してグローバル化、情報化、少子高齢化について、効率と公正についての授業を行った。また、単元の最後には、グローバル化、情報化、少子高齢化のいずれか、または複数に関連したルールや方針、政策について、効率・公正という視点から分析させるエッセイ課題を出した。新聞にはルール、政策に関するニュースや、そのニュースに関する各社の考えが見られることから、この単元で新聞を活用することが有効であると考えた。



授業では、この単元で扱うテーマに関連した新聞記事を複数提示し、ルールや方針、政策に対する評価が新聞社によって異なっていることを記事の内容、記事の配置、社説などから確認した。そのうえで、それぞれの考えは、おもにどのような立場によるものなのかを分析し、その立場から見た当該記事に関する効率、公正を考察する活動を行った。

授業を通して生徒は、同じニュースでも新聞社によって見方や考え方が異なることがわかり、それぞれの立場から効率、公正を分析し理解しているように感じられた。最終課題のエッセイでは、それまでに

学習した内容をいかして生徒自身がテーマに関する視点を独自に設定し、それについての効率や公正を分析するものも見られた。

このように、あるニュースに対する評価を複数の視点から分析するという点で新聞はとても有効な資料であるということがわかった。(文責：吉田)

3. 4. 高校 1 年生 (現代社会) での取り組み

高校 1 年生は現代社会の最初の単元として新聞切り抜き作品作りを通して現代社会を幅広く知る取り組みを行った。各家庭で新聞を購読している生徒は決して多くない。そのため、本年度も学校で 6 紙を 10 部ずつ 35 日間分購入し、自由に手に取れるよう工夫した。新聞購入に際しては地域の販売店に協力をいただいたり、教材用価格で購入することにより、生徒の負担を減らすことができた。特に教材用価格での購入は特定のイベント(選挙や憲法記念日)に合わせて 1 日単位で、低負担で購入ができるため、重宝している。

生徒は適当な日の新聞を手に取り、自由に読み進める中で、テーマを徐々に絞っていくように指導した。テーマ決めに際して回し読み新聞や仮テーマを掲示してお互いにコメントする活動を通して、現代社会の特徴を俯瞰するよう促した。

生徒はテーマに沿って 30 以上の記事をあつめ、それらのなかから厳選した 10 から 15 程度の記事を模造紙にレイアウトした。また、テーマ設定の理由やまとめを書く中で思考を促し、表現する場面も設けた。作成した作品は東京新聞主催新聞切り抜き作品コンクールに出品した。生徒は慣れない新聞をめくりながら、

また、提出された課題をクラス内で発表し、交流する時間を設けた。交流の活動を通して、発表する能力を高められたとともに、自分が調べたテーマ以外の社会で起こっている課題についても考えを深めることができた。

これらの活動を通して生徒たちは現代社会のさまざまな課題に気づき、またそれらを深めることができた。(文責：今井)

3. 5. 高校 2 年生 (DP 言語と文学) での取り組み

高校 2 年生は、IB Language and Literature SL コースで、1.「文化的な文脈における言語」、2.「言語とマスコミュニケーション」の学習に、新聞記事を活用した。

1.「文化的な文脈における言語」では、特定の文化的な背景に言語がどのように発展するのか、それが世界にどのように影響するのか、また言語が個人と集団のアイデンティティをどのように形成するのかを探究する。まずそれらに関連するトピックを定め、それに関連する記事を分析した。

関連付けられるトピック：

ジェンダー（不平等、男らしさや女らしさは何でできているのか）

言語とコミュニティ（国家や地域、サブカルチャー）

言語と個人（多言語主義や二言語主義、言語習得歴や言語アイデンティティ）

言語と権力（言語帝国主義、プロパガンダ）

言語の歴史と進化（言語の喪失と復活）

翻訳（何が加えられ、何が失われるか）

言語と知識（科学と技術、符牒（隠語）や業界用語）

言語と社会関係（社会的地位、職業的地位、人種）

言語と信仰（宗教的な説話、神話）

言語とタブー（汚い罵り言葉、ポリティカル・コレクトネス）

2.「言語とマスコミュニケーション」では、言語がメディアでどのように使われているのかを考察する。テキストが作られ受け取られる状況が、その手段となるメディアによってどのように影響されるかという問題にも取り組んだ。

考察するメディアの形式：

論説、新聞に掲載される広告、風刺など。

情報の伝達、受け手に対する説得、エンターテインメントといった目的のために新聞が言語と画像をどのように使用するか：

受け手の多様性、検閲、プロパガンダなど

（文責：首藤）

4. 考察と課題

本年度の取り組みを振り返り、当初掲げた多様なものの見方を探究するうえで新聞を活用することが出来たと考える。各教科の教員が創意工夫しながら、自分の視点と記者の視点、A 紙の視点と B 紙の視点といった具合に、多様な視点に気づくことができた。

なお、これらの取り組みはの多くは NIE 協会から支給される新聞を用いずに行った。2 か月ないし 4 か月という限られた期間でどのような記事が載るか分からない中でそのチャンスにかけて授業を計画することはなかなか難しい。むしろ長期的なスパンで新聞活用を考えるために、図書室などで年単位で新聞を準備し、学校図書館司書や司書教諭とも協力しながら学校として新聞活用を進めていくことこそ望まれるのではないだろうか。

本校は指定校に選ばれる以前から新聞の活用に力を入れており、今回支給された新聞のうちほとんどは限られた予算の中ではあるものの、すでに図書室で導入していた。そのため、どちらかといえば NIE 用の新聞に切り替える手間や、報告書の作成など、教員側の負担が多かったように思える。

なお、次年度から NIE をさらに推進するために全国一般紙 3 社と電子版の契約を始める。文部科学省の補助金も決定し、令和 2 年度から生徒は順次電子端末を所持するようになる。これに合わせて生徒の探究学習にもデジタル化が求められるのではないか。1 月からトライアル版をいくつかの教科で使用しているが、生徒から好評であり、おおむね効果的に使用できていると感じている。紙媒体であれ、デジタル媒体であれ、新聞の価値はそこに書かれた情報であることには変わらない。本校では来年度以降、新しい技術を用いた NIE にも力を入れ、指導法やその意義を研究していく。

（文責：今井）

NIEにおける本校の取り組み

群馬県立吉井高等学校

教諭

高橋 寿郎

1. はじめに

今年度、本校はNIEの指定を受けることになった。前年まで尾瀬高校が担当していたが、次の担当が西毛地区の高校で実施してほしいということで、「政治・経済」を担当している先生が授業で新聞を取り扱っていたので、その先生に協力してもらうことで教科の特色を生かしながら取り組んでみることにした。

なお、教科的には地歴・公民科の中から3教科を対象とすることで、9月から12月までの4カ月間、新聞を配達して頂くことができ、7社の新聞を扱うことにした。

毎日配達される新聞をどこに置くかについてだが、図書館にはすでに新聞が備えられていたので、それも有効活用できる場ととらえるも図書館以外で生徒に新聞を目にしやすく、気軽に手に取って広げてもらえる適した場所はないか考えた結果、北校舎と南校舎の1階渡り廊下の脇のスペースにある「コモンホール」の机を間借りして置くこととした。(右の写真)



普段の生徒の新聞を見ている状況についてだが、たまに見た形跡があるぐらいで、なかなか見ていないことが伺える。生徒にしてみれば、授業と授業の間の休み時間は教室の移動に追われ、新聞を見る時間はなかなか作りづらい。放課後も部活動等に動くので、コモンホールに立ち寄って新聞を見るのも厳しかったようである。

2. 各教科での取り組み

〔政治・経済〕

政治経済については、今年度担当している下風博之先生にお願いした。

本校では今年度文化祭開催の年ということもあって、文化祭での展示発表を目指し、9月のある1日の新聞7紙をもとに、その日の記事を新聞から切り抜いて模造紙に貼り、大きな壁新聞を作成し教室と廊下に数多く展示した。当日は、訪れた人たちにプレゼンテーションをする場面もあり、生徒たちはいろいろな力が試される良い機会になったようである。



(展示のようす)

〔地理〕

地理は自分が担当した。公民部会でこのN I Eに話が及んだ際、「明るい話題を探させてみたらどうか」ということが話の中からでてきたので、まずはそれを探させてみることにした。ただ、本校の生徒が今まで新聞をどのように活用してきたのか、全く掌握していないので、夏休みに入る時期に図書館にある新聞をもとに、「明るい話題の記事」を1つ探させてその記事をコピーして切り抜きさせ、要約と感想を書かせてみた。この場面で生徒たちの取り上げた記事のほとんどがスポーツに関する記事だということが分かった。日常生活において明るい話題を提供しているのは、やはりスポーツ分野だということが分かった。しかしその一方で、明るい話題＝スポーツだと分野的に視野が広まらないと思い、スポーツに限らず明るい話題、それも「地理」の分野に関係している記事に限定して探させてみてはどうかと考え、その線で方針を決めた。

取り扱う新聞についてだが、9月分の新聞は「政治・経済」の方ですでに使われ、在庫があまりなかったので、10月から12月の新聞に限定して扱うことにした。1度経験したこともある取り組み手順は各自熟知していたが、明るい話題を取り扱っている記事は意外にないものだと気づき、記事を探すのに相当時間を取られている生徒が多かった。現代における新聞記事の実情を知る機会となったようである。

プレゼンテーションではグループごとに行い、発表者は自分が取り上げた記事について要約し感想をまとめたものを発表し、聞く側は記事の題名、新聞社名、聞いてみての感想をワークシートに記入するといった作業を行わせた。生徒たちはプレゼンにおいても聞き取りにおいても、みんな集中して取り組んでいた。



(調査と発表のようす)

〔世界史〕

世界史A・B合わせて6クラスある中、2学期途中から自分が担当することになった1クラスについて、世界史にとらわれず広く「歴史」に関する記事を1つ取り上げて、要約と感想を書かせ、グループごとにプレゼンテーションを行う形式で実施した。

生徒たちは当初戸惑いがあったものの、いくつかの新聞を手にして歴史に関する記事を探して作業を進めていた。取り上げていた記事は、世界史関連よりはむしろ日本史関連の記

事の方が多かった。なお、発表においては、地理と同様にグループごとにプレゼンテーションを行わせた。プレゼンでは今までいろいろな場面で行ってきた経験もあってか、みんな堂々と発表を行い聞き取りも熱心に取り組んでいた。



(発表ならびに聞き取りの様子)

3 実践の成果と今後の課題

生徒たちの声を拾ってみると次のように上げられる。

「地理の授業を受けて印象に残っていることは新聞の中からニュースを自分で選び、要約した文と感想をプリントに書いたことです。私は普段全然新聞を読まないで、いろいろなニュースを知ることができました。新聞はいろいろなことが残っているので、普段から読むようにしたいと、この授業を受けて思いました。」

「自分を含めて最近の若い人は新聞に触れる機会が少ないので、久しぶりに新聞に触れられて良かったと思いました。これからは日頃より新聞に目を向けていこうと思いました。」

「同じ班の人たちがたまたまみんな違う新聞社の記事だったので面白かった。色々な明るいニュースを知ることができたので良かった。」

「色々なことがこの世の中で起きていて、改めてとても大変なんだなと思いました。私が知っていることは少ないんだなと気づかされました。」

「どの記事を切り抜くか決めるときに、いつもよりしっかり新聞を読んだので、これからは何もない時でも新聞を読もうと思います。」

「私の家では新聞を取っていないので、こういう取り組みはとても新鮮でした。」

「私の周りには最近起こったニュースを知らなかったり新聞や報道番組を見ない人がたくさんいるので、授業で新聞を取り扱っていけば少しでも関心を持てると思うので良いと思った。」

「私自身、新聞をあまり読むことが少ないので、内容読解をできる機会ができて良かったと思う。」

以上、一部ではあるが生徒たちの感想を踏まえると、今回の取り組みは生徒たちにとって新聞を通して社会へ関心向けさせるにはかなり効果があったようである。そして、何よりも今回の取り組みを生徒たちは好意的に受け止めていることがわかった。その一方で、新聞

に関する生徒たちの実情を知る機会を得られたのは何よりである。今後とも新聞に触れる機会を作り出すとともに、新聞の記事を手掛かりにいかに深い学びにつなげていくか、十分検討していかなければならないと思った。

「目的意識をもち、自分の考えを表現できる児童の育成」

－新聞社への投句・意見文の投稿を通して－

沼田市立利南東小学校

林 めぐみ

1 実践の概要

本校は、NIE 実践校として指定を受け3年目の実践を行ってきた。全校児童で季節毎に行う俳句作りと新聞社への投句を継続している。また、国語科で新聞を読んで意見文を書いたり、日常生活の体験をもとにした作文や意見文を書いたりして、投稿する活動も継続してきた。新聞社への投句・投稿をきっかけとした言語活動の体験を重ね、児童が目的意識をもって自分の考えを表現できる能力を身に付けられるよう指導を行った実践を紹介する。

【主な取組】

- (1) 新聞の閲覧 (第5・6学年 通年実施)
- (2) 上毛俳壇への投句 (全校 通年実施)
- (3) 意見文の投稿 (国語科 単元「文章構成の効果を考える②」 第6学年 2月実施)
- (4) 学習プリント「新聞を読もう」(第5・6学年 通年実施)
- (5) 上毛新聞社編集局 NIE 担当を招いた出前講座「新聞の読み方教室」

2 新聞の置き場と整理の方法

毎日配達していただく新聞は、高学年の教室がある3階で管理を行ってきた。誰でもいつでも新聞の閲覧ができるように廊下の新聞ラックと新聞用のテーブルに置かれ、NIE 担当が定期的に新聞の入れ替えを行ってきた。1週間を過ぎた新聞は別室で新聞社毎に保管してきた。



放送室の新聞保管棚の様子

3 実践の内容

- (1) 新聞の閲覧 (第5・6学年 通年実施)

本実践でのねらい

世の中の動向を知り情報を得るとともに、言語感覚を豊かにする。

新聞ラック・新聞テーブルの設置

- ・新聞ラックは高学年の教室前廊下に設置した。主に子ども新聞をはさんでおき、自由に閲覧できるようにした。
- ・今年度は新聞用の長テーブルを用意して各社の新聞を並べ、比較しながら読めるようにした。大きなニュースや学習している内容と関連している記事は、読む意識を高めるために紹介文も一緒に掲示した。
- ・休み時間に、児童は廊下を通りながら新聞に手を伸ばして写真を見たり記事を読んだりする様子が見られた。長テーブルに置くことで、新聞を開いて読む様子も見られるようになった。
- ・スポーツ新聞や4コマ漫画、連載の記事は、興味のある児童が楽しみに待っている様子が見られた。



新聞テーブルと閲覧の様子

国語科での読む活動

- ・学期末の5・6年の読書指導では、長期保管しておいた上毛新聞の「風っ子新聞」、読売新聞「読売子ども新聞」を利用し、新聞に親しめるように自由に読む活動を行った。興味のある記事を夢中で読み、児童間で情報を共有する様子が見られた。



学期末恒例の子ども新聞の閲覧

(2) 上毛俳壇への投句（全校 季節毎に実施）

本実践でのねらい

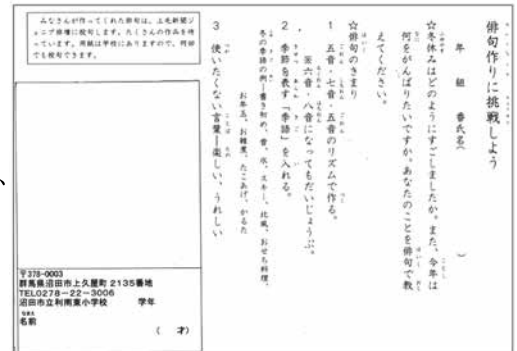
学力向上の取組の一環として全校で俳句作りに取り組み、児童の豊かな言語感覚を育成する。

全校への周知

- ・職員会議でNIE担当から各学年へ投句活動と呼びかけ、投句方法を周知した。
- ・季節毎に全児童に俳句作りの用紙を配布し、投句のきっかけ作りをした。テーマや俳句のリズム・季語の例を紹介し、俳句を作る意欲を高めたり基礎知識を伝えたりした。

投句用紙の作成・設置

- ・いつでも俳句作りや投句ができるよう学校統一の投句用紙を作成、設置した。用紙は、低学年用と高学年用を作成し、児童の実態に応じて書けるようにした。投句用紙を置く棚を用意し用紙は随時補充していった。



俳句作りの呼びかけと投句用紙

投句作業・掲載作品の掲示

- ・各学年で作った俳句はNIE担当がまとめて上毛新聞社へ送った。たびたび入選作品として掲載され、児童の俳句作りへの関心を高めていた。新聞をコピーして校舎内3カ所に掲示し、俳句作りの参考になるように紹介した。作品が選ばれると、児童や保護者、学校職員の喜ぶ様子が見られた。児童同士で褒め合う様子も見られ、よりよい人間関係作りにも生かされていた。

(3) 意見文の投稿

国語科 単元「文章構成の効果を考える②」

(学校図書 第6学年2月実施 全5時間)

本実践でのねらい

国語科の書く領域において、新聞記事や投稿欄を利用して意見文を作成する指導を行うことで、段落相互の関係を捉えたり、反論の段落を挿入する効果を考えたりする力を育成する。

実践前の児童の実態把握と教材準備

- ・既習事項の確認（文章構成の型とその構成要素、意見文作成の活動経験等）を行った。
- ・上毛新聞より児童が関心をもちそうな記事を選定した。
- ・選定した記事の内容読み取りと自分の考えをもつためのワークシートの作成をした。
- ・上毛新聞読者投稿欄「U22 私の声」への投稿方法を確認した。



俳句の入選作品の掲示

第 1 時

- ① ねらい—新聞記事を読んで自分の意見をもって意見文を書き、投稿する活動を行うことを知る。
- ② 児童の様子
- ・新聞の読者投稿欄について知り、意見文を書いて投稿する活動に関心をもつことができた。
 - ・意見文の文章構成には基本となる三つの構成(頭括・尾括・双括)があることを復習できた。
 - ・ワークシートを用いて新聞記事の内容理解と自分の意見をもつ



内容を読み取るワークシート

第2時

- ① ねらいー帰納的・演繹的な文章構成の仕方を理解する。
- ② 児童の様子
- ・ 具体的事例の位置によって、読み手が受ける感じに違いがあることに気付くことができた。
 - ・ 帰納的・演繹的な文章構成では、用いる接続語が異なることを理解することができた。

第3時

- ① ねらいー反論の入る文章構成を知り、自分の意見に対する反論や異論を考える。
- ② 児童の様子
- ・第1時で考えた自分の意見に対する反論を考える際には、友達との意見交流の場面を設定したことで、多様な異論を情報として得ることができた。
 - ・文章構成に反論の段落を入れることで、自分の意見をより説得力のあるものにすることができると理解できた。

第4時

- ① ねらいー反論の段落を入れて双括型で構成メモを書く。
- ② 児童の様子
- ・第3時の意見交流で得た異論を生かして反論を考えることができた。
 - ・双括型の文章構成を使って、「中」の段落に反論を位置付けて構成表にメモを書くことができた。
 - ・「終わり」の段落では、反論に対する自分の考えをもち、自分の意見をより説得力のあるものにすることができた。

[illegible]

構成表とメモ

第5時

- ① ねらいー構成メモを利用して意見文を書く。
- ② 児童の様子
 - ・構成表のメモを利用し、段落毎の内容を確認したり、接続語や文末表現に気を付けたりしながら意見文を書くことができた。

第 6 時

- ① ねらい—友達の意見文を読んで、反論による文章全体の構成の効果を捉える。
- ② 児童の様子
- ・友達の書いた意見文を読んで、事例と主張との関わりや反論の効果を考えることができた。

感染者が出る前に予防を
私は上毛新聞の「全小中学生に備蓄マ
スク配付」という記事を読みました。私
は高崎市の全小中学生に備蓄マスクを
配付するのは、新型コロナウイルス感
染の予防になるのでよいと思いました。
なぜなら、国内での感染者が増えて
いながら、高崎市にも感染者が出てま
つてからではおそいと思ったからです。
マスク、薬剤師から、全校教員・生徒に
マスクの正しい装着方を教えるとい
ただけるそうで、予防方法を知るよい
機会になると思います。
確かに、今、備蓄マスクを配つてしま
うとならないさというときのマスクが
なくなってしまうという考えもある
かもしれません。
しかし、備蓄マスクにも限りがある
ので、配つてもなくなるときは感
染者のいない今、予防のためのマ
スクを配るのよいと思います。取組
に備蓄マスクを配るといふ、全小中
は賛成します。

新聞記事についての児童の意見文

- ・同じ新聞記事を元にしても、一人一人意見や考えが違ってくることに気付くことができた。
- ・新聞社への投稿の方法について知り、いつでも投稿できるよさを理解することができた。

実践後

- ・新聞社へ投稿一誤字脱字の確認と訂正後、郵便で投稿した。
- ・投稿後、感染症予防のための学校が臨時休業となってしまう、他学級の児童や保護者に意見文を紹介できず残念であった。

(4) 学習プリント「新聞を読もう」(第5・6学年 通年実施)

本実践でのねらい

新聞を読んで広く世の中のことを知ると共に言語に親しみ、自分の考えをもち表現できる児童を育成する。

児童の実態把握と事前の準備

- ・4月実施の全国学力・学習状況調査の「新聞を読んでいますか。」という質問では、本校の多くの児童が「ほとんど、または、全く読まない」と回答していた。
- ・新聞記事から児童が興味を持ちそうな記事を選び、記事の内容を読み取る設問を考え、学習プリント「新聞を読もう」を作成した。設問の最後には、児童が記事を読んでどのようなことに興味をもち、どんな考えや意見をもったか記述させる問いを設定した。

学習プリント「新聞を読もう」

家庭学習として学習プリントの配布及び掲示・投稿活動

- ・週末に新聞記事を読ませて学習プリントに答えさせた。国語の時間に答え合わせをし、記事の内容についてどんな意見をもったか児童間で交流させた。
- ・各学級で数名に声を掛け、学習プリントに記述したことをもとにして意見文を書かせた。上毛新聞読者投稿欄「U22 私の声」に投稿し、多くの児童の作品を掲載していただいた。
- ・掲載された記事は校内3カ所に掲示し全校に紹介した。児童の自己肯定感が高まる様子が見られた。

(5) 上毛新聞社編集局 NIE 担当を招いた出前講座「新聞の読み方教室」

上毛新聞社による出前講座で NIE 担当の子安悟記者による「新聞の読み方教室」を開催した。5年生全員が新聞記事を読む貴重な体験を行い、新聞の紙面の構成や記者の取材の工夫・努力など教えていただいた。子ども達は、「新聞の構成が分かった」「大きなニュースや関心のある記事を読む習慣を付けたい」など感想をもつことができた。



「新聞の読み方教室」の様子

4 児童の変容と今後の課題

(1) 児童の変容

- ・児童にとって新聞が情報を得るための身近な存在となり、休み時間に自分の目的にそって新聞を読む姿が頻繁に見られるようになった。
- ・全校児童で俳句作りに取り組むことができ、言語活動の機会が広がった。季語の利用や NG ワードを知らせることで言語感覚を高めていた。入選作品の紹介により自己肯定感の高まりを感じられた。
- ・新聞記事を利用して自分の意見をもち、意見文を書いて投稿する活動の継続により、自分の考えをまとめる力が向上した。400字程度の文章記述に抵抗感が減り、構成よく記述できるようになった。

(2) 今後の課題

- ・6年の社会科でも新聞記事を用いた授業が行われた。今後も児童が目的意識をもって新聞を活用できるように各教科で実践を行い、全校で取り組む NIE を目指したい。
- ・子ども新聞を購読できる体制を整えることで、児童の新聞を読む習慣がさらに向上すると思われる。

ものの見方や考え方を深め、思いや考えを伝え合う生徒の育成 －NIE 2年目の取り組み－

高崎市立大類中学校

教諭

山田ミチ子
石原 浩毅

東谷 美代
藺田 美南

1 取り組みの概要

本校は昨年度からNIEの実践指定を受け、2年目の取り組みとなる今年は、校内研修の一環としていろいろな教科で新聞を活用した授業づくりに取り組んだ。

国語科では、2年生で「話す・聞く」、3年生で「書く」の学習で新聞記事を利用するとともに、地域人材の活用や新聞への意見文の投稿を通して、論理的に考え、わかりやすく伝える力の育成を進めた。また、社会科では、新聞記事を利用してマスメディアや経済活動について具体的に考える授業を工夫し、さらに英語科で英文記事の読解に取り組むなど、各教科で新聞を授業に活用する授業実践を行った。

2 実践の内容

(1) 国語科の実践

① 2年生の実践

2年国語科では、「話すこと・聞くこと」の学習に、グループで「まわし読み新聞」を作成する活動を取り入れた。

各自が興味をもった記事を持ち寄り、記事の内容について要点を伝えるとともに、その記事を選んだ理由や記事に対する感想、意見を発表する。その後、発表者の意見について質問したり、自分の考えを伝えたりする話し合いの時間を設け、最後に持ち寄った記事をレイアウトしながら台紙に貼り、話し合いで出された意見や感想を短くまとめて書き込んで「まわし読み新聞」を完成させる。

また、授業に本校のNIEの取り組みについて関心をもってくださった地域の方をゲストティーチャーとしてお招きし、生徒の意見や感想に対して質問したり、ご自分の考えをお話しいただいたり、学習を深めるサポートをしていただいた。

成果：できあがった「まわし読み新聞」は廊下に掲示して生徒全員が見られるようにしたが、一つの記事についても、いろいろな捉え方、考え方があることを知るとともに、理由を明確にしてわかりやすく伝えることの大切さを学ぶ学習となった。



②3年生の実践

新聞をとっている家庭は半数以下、新聞を毎日読んでいる子はいない、という現状の中で、改めて新聞の役割を考えさせ、良さを実感させたい。さらに、受験を控えた生徒に、「書くこと」の領域「目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめて、文章全体を整えること」の力を一層つけたいと考え、「新聞社に意見文を投稿しよう」という授業を行った。

新聞の「投書欄」を知っている生徒は、各クラス1～3名程度に留まった。「新聞」には世の中の出来事を伝える役割があるが、「投書」は何を伝える役割があるのかを考えさせた。実際に新聞を渡し、投書欄を見つけさせて読ませると、投書は「世の中で起こった出来事について、国民が何を考えているかが分かる」「世の中の人々が今何に関心があるかも分かる」「地域や身近で起こった出来事を伝える役割がある」という意見が出された。新聞社は、世の中の出来事を伝えるだけでなく、世論・民意を広げる役割も担っていること、そして、わたしたちは、投書を活用して世の中に自分の考えを広げることができるということを生徒に伝えた。「投書は知らなかったけれど、読んでみたらとても面白かった。家でも読んでみたい。」「私も自分の考えを学校以外の人々に伝えてみたい」「短い文でも内容が詰まったものを書きたい」という意見が出された。

成果：「投書って何だろう？」という疑問を持ちながら実際の投書欄を読ませることで、投書の役割を意欲的に考えさせることができた。投書の役割を知ったことで、書くための目的・意図が明確化し、自分はどんな考えを世の中の人に伝えたいのか、どのような文脈で書いたら読む人に分かりやすく伝わるかという意識を持って原稿作成に臨むことができた。実際に新聞社に投稿し、何人もの生徒の考えが掲載され、喜んだり、友達を賞賛したりする姿が見られた。

今後も、NIEを通して、自分の意見をもつことの大切さと、それを発信する方法や意義を考える学習活動を工夫していきたい。



読売新聞「気流」令和二年一月五日掲載

米バスケ じかに見たい

五輪・パラリンピックが日本で開催されるのは、とても光栄なことだ。2016年のリオデジャネイロ大会はテレビで観戦したが、今回はじかにアスリートたちの活躍を目にしたい。バスケットボールが好きなので、強豪アメリカの迫力あるプレーを見たい。ずっと米プロバスケットボール協会(NBA)の試合を現地で見たいと思ってきたが、飛行機が苦手で、外国に行くのが難しい。そんな私の夢をより身近にしてくれて感謝している。

中学生

(群馬県高崎市) 14

音楽の可能性にぜひ触れて

(高崎市・14)

好きな音楽は何ですか？ 広く知られている曲からマイナーな曲まで、好きな音楽は人それぞれだろう。私の周りには、はやりの音楽が好きだという人がたくさんいる。多くの人が好んでいるから「流行の曲」なのだろうが、なぜこれほど多くの人が同じ曲を好きになるのかと私はいつも不思議に思う。

私の好きな音楽はロック。それもかなり前に人気があった曲や、あまりメジャーでない曲がほとんどだ。そのため同じ音楽が好きな同志は、周りにはほとんどいない。皆が話している音楽の話題もよく分からない。しかし、私は自分の好きなジャンルの音楽を探求したり、今まで知らなかった音楽の世界を知る

のが好きだ。世界には数え切れないほどの音楽がある。もちろん、流行の音楽を聴くことが悪いとは言わないが、それだけではもったいないと私は思う。音楽の持つ可能性は、みんなが思っているよりずっと大きいと感じる。私はみんなに、もっといろいろな音楽を聴いたり、知ったりしてほしい。なぜなら、その中で、自分自身を大きく変えるような音楽がきっと見つかると思うから。

上毛新聞 U22 令和2年1月17日掲載

（２）社会科の実践

授業実践①

『現代の民主政治』の学習のなかで、世論の形成と、世論に大きな影響を与えるマスメディアについての授業を行った。情報を得る際にメディアリテラシーがいかに重要であるか、理解を深めるため、新聞を比較する作業を行った。



比較した記事は、発行された日も取り扱った内容も同じであるが、見出しや記事に割いている量の違いから受ける印象が異なってくる。生徒たちは実際に新聞記事を読み、グループ内で新聞記事Aと新聞記事Bを比較して、それぞれから受けた印象を発表した。

生徒たちが記事の比較から受けた印象（ワークシートより）

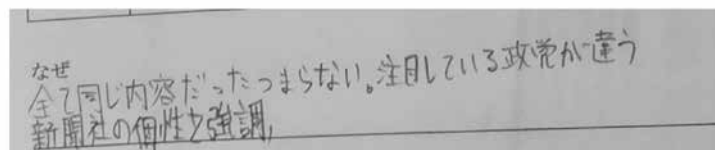
新聞記事A

- ・ 社会保障を充実させていく
- ・ 「最大の課題は少子高齢化」と書かれている
- ・ 改憲にも触れている

新聞記事B

- ・ 憲法改正を重視している
- ・ 改憲が多く書かれている、社会福祉についても触れている。

発表後、「なぜ同じ情報でもこのような違いが生まれるのか」と発問し、考えを深めた。



成果

実際に新聞を用い、時事問題について内容を比較させたことで、印象の違いを実感することができた生徒が多くいた。また新聞だけにとどまらず、ネットニュースやテレビニュースなど比較対象を広げたいと興味をもった生徒もいた。自分の考えを持つにあたり、複数の情報源を持つ、批判的に読みとるということの実践の第1歩として新聞は有効であった。

授業実践②

株式市況欄から好きな株を探す様子

企業についての学習のうち、株式会社の仕組みについて学習した。株式の売買について学ぶ中で、なぜ株価が変動するのか実感をもてるよう、実際に株式を購入するという設定で授業を行った。予算は10万円とし、新聞の株式市況欄を見て、自分の気になる銘柄を買えるだけ買わせた。毎日（毎時間）株価は変動していることを踏まえ、3週間後に高くなる株式を予想させた。



成果

株式市況欄を初めて見た生徒もあり、その企業の数に驚く様子が見られた。一週間ごとに中間報告として、廊下に市況欄を掲示したことで、自分の買った株の株価の変動に興味を持つ生徒が多くいた。また併せて新聞の経済欄を読むことができたので、企業の合併や新技術の開発など株価にかかわる記事を生徒自ら調べるようになった。株価の変動の仕組みについて、需要がどう動くのか理解を深めることができるようになった。

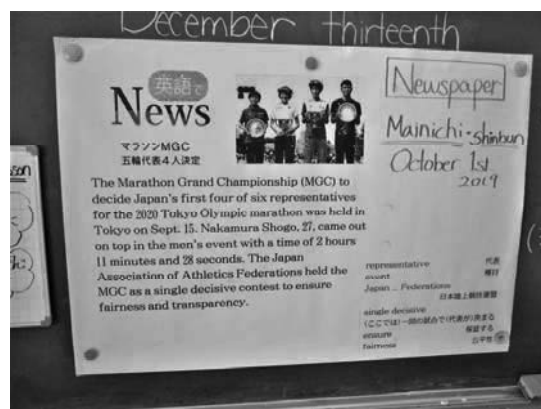
(3) 英語科の実践

今年度実践を行った中学3年生は、普段から読解力を高めるために素早く内容を読み取る学習を行っている。今回は、1つのテーマについて書かれたまとまりのある英文記事の要旨を捉えることに挑戦した。英文には新出の表現もあり、前時までに新出単語・語句の学習を導入する必要はあったが、受験生としては是非理解し、運用してほしいと考える文法事項も含まれていたため、教材として適していたように感じている。また実施学年は、2年次にCLILの実践（わが町を英語で紹介）や、海外の姉妹都市とのビデオ・ライブ交流学習を経験しているため、英語と他教科の要素を取り入れた教科横断的な授業に慣れている。今回の新聞を扱った実践においても、生徒が英字新聞自体に興味を示していたこと、また英語で書かれたニュース等の記事を読解したいという意欲が高かったことから実現した。同時に、間もなく日本で始まる国際的行事『東京オリンピック』に関心を広げるための大きなきっかけとなった。

授業改善の視点

- ①身近にある新聞でオリンピックに関する記事を個人で読む。
(読解マークをつける→概要をまとめる※全訳はしない。)
- ②ペアで読み取り方を交流する。
(読み取りに読解マークをどう役立てたかを伝え合い学び合う。)
- ③グループで内容の要旨をホワイトボードにまとめる。
(個人の読解内容を班活動で発表する。)

○概要を正しく早く捉えられるようになるだろう！
○日本で行われる国際的なイベント、東京オリンピックに関心を広げられるだろう。



成果

普段取り組んでいる読解法が英語版の新聞記事を読むことにおいても有効だと実感できる実践であった。英語を得意と感じる生徒も、そうでない生徒も自分なりに読解し、その後、異なる読解の視点や理由を交流させたり班で要旨まとめに挑戦させたりしたことは、全体の学びを深め、それぞれの読解力を確認したり向上させたりすることに役立ったようである。

今後も教室で学んだ技能や知識を実際の生活で活用できる場面を設定し、課題解決に向けて自ら取り組む生徒を育てていきたい。

生徒の感想

- ◎オリンピックへの興味が湧いた。
- ◎グループ読解で内容理解が進んだ。
- ◎班交流でE→Jの仕方を学べた。
- ◎短くまとめるのが難しかった。
- ◎英文記事を読むことに面白さを感じた。
- ◎短くわかりやすくプレゼンできた。

新聞記事を読み、自分の感想や意見を書いたり、 発表したりできる生徒の育成

沼田市立薄根中学校

教諭

兵藤 泰明

1 実践の概要

本校は、昨年度よりN I E実践校として指定を受け、2年目の実践を行ってきた。

- (1) 国語科での実践
- (2) 理科での実践
- (3) 上毛新聞ひろば欄「U22 私の声」への投稿

2 新聞の置き場と整理の方法

配送された新聞の置き場所を今年度は、多目的室前の廊下に場所を作った。多目的室前の机の上に＜写真1＞のように積み重ねバスケットを置き、新聞社ごとに整理した。また、途中より、新聞の名前が見えるように立てて掲示する方法にした。＜写真2＞

読み終えた新聞の整理の方法としては、まとめてロッカーの中に保存した。そして、本校で行っているリサイクル活動で古新聞は処理した。

3 実践内容

(1) 国語科での実践

① 単元名

情報を読み解く 教材名「新聞記事を読み比べよう」

② 授業の視点

文章の内容を分析したり表現の仕方を批評したりする力を身に付けるために、新聞記事を利用したことは効果的であったか。

③ 育成を目指す言語能力

- 文章中における語句に注意して、書き手の立場や意図を読み取る能力。
- 複数の文章を読み比べるなどして、それぞれの構成や展開の違いについて評価する能力。
- さまざまな文章に表れているものの見方や考え方に触れて、自身の意見や考えを形成していく能力。

④ 教材観

メディアリテラシーの重要性が叫ばれるようになって久しい。我々は多くのテレビや新聞、インターネットなど様々なメディアに囲まれて暮らしている。これら多くのメディアから提供される情報は、発信者の意図が多分に含まれている。それを他のメディアや自分の価値観などと照応して、評価や分析をし、自身の考えを形成していくか求められている。

生徒たちを見ても、また、生徒に行ったアンケート結果からも、インターネットをはじめ、さまざまなメディアに触れており、また受けている影響が大きいことがわかった。特に生徒の多くが情報を得るインターネットはその特性上（誰もが自由に不特定多数の人に対して情報を発信しやすい）、個人の意見が特に表現しやすいメディアであるため、情報発信者の意図が極めて偏りやすいことは、生徒たちも理解はしている。しかし、新聞については、その存在位置から生徒たちの信頼性は高く、かなり記事内容を信用しており、感化されやすい。それだけに、情報に掲載される写真やグラフなどの資料、読者や視聴者を誘導しようとする表現などを考慮したり分析したりしながら



＜写真1＞



＜写真2＞

読む態度が必要である。その際有効なのはメディアの特徴を理解しつつ、一つの事案に対して多面的な見方を心がけていくことだ。

情報が氾濫している現在、情報の中心的な発信者としてのメディアにどのように対応するかは大きな問題である。「メディアから送り出される情報は現実そのものではなく、送り手の観点から捉えたものの見方である」という筆者の論に学習者は目から鱗が落ちる思いであろう。また、「現在は、情報通信システムの発展により、誰もが情報を発信できる時代」になっているがゆえに、送り手としてのメディアリテラシーの重要性をも述べている。

筆者の主張は、「新聞記事を読み比べよう」で具体的かつ体験的に学習することができる。同一の案件を記事にしても、視点の異なりによって、見出しの立て方、掲載した写真や資料などによって、記事の内容には大きな違いが出てくることを確認することにより、メディアの伝える情報とは何であるのかを考えて読むことができるようになるであろう。

⑤ 校内研修との関わり

本年度の校内研修のテーマは「主体的に学習に取り組む生徒の育成～各教科における学習課題の工夫と振り返る

学習活動を通して～」である。また、昨年度より薄根中学校ではNIEを活用した取組を行っており、本年度は2年目となる。その中で、国語科では生徒が主体的に取り組むための工夫として、生徒の生活にある話題や課題を題材とした活動をしてきており、自分の事を紹介したり、友達の事を知ったりする活動に意欲的に取り組む姿が見られる。新聞活用としては短学活の中で日直の話として自分で選んだ新聞記事を紹介したり感想を話したりする活動もしてきており、新聞に対して、生徒は日常的に接するようになってきた。「本単元では、その新聞を活用することで、これからの新聞への見方が変わることを生徒が実感することにより主体的に授業に取り組む事ができるのではないだろうか。」と考える。

⑥ 本時の学習

1) 目 標 新聞記事の語句や表現、写真などを分析し、メディアの特徴を理解することができる。

2) 準 備 教科書 ワークシート ホワイトボード 既習事項確認カード

3) 展 開



学習活動および予想される生徒の反応	時間	支援・指導の留意点および評価
1. メディアを視聴するときのポイントを復習するとともに 本時の学習のめあてを確認する。 ・「メディアの特徴」と「メディア・リテラシー」などの確認。	10	・11月上旬に実施した「オリンピックマラソン会場変更」に対するクラスの意見と、新聞記事を読んだ後のクラスの意見を提示し、比較させ、その変化について考えさせることで本時の学習意欲を高められるようにする。 ・教科書の内容である既習事項から、メディアの性質はどういうものなのかメディアの「利点」と「限界」をキーワードにして確認させる。

		・本時の学習に期待がもてるようなめあてにする。 ・本時の授業の前に、あらかじめ本時で使用する新聞記事に目を通しておく。
本時のめあて：新聞記事を読み、その伝え方を分析・評価しよう ～メディアの報道の偏りを見破れ！～		
2. 与えられたメディア（新聞）の情報である「東京オリンピックマラソン会場変更」の記事を読み、どんな観点で切り取られたものなのか読み取る。 ・内容……東京から北海道へ開催（否定的） ・立場……東京 ・地域……日本（東京を中心） など 3. なぜ新聞を読んだ後、自分たちの「東京オリンピックマラソン会場変更」に対する評価が変わったのか新聞記事から考える。 （個々での新聞記事分析） 予想される生徒の反応 ○内容：変更否定的 ・予算が増える・急なことだから ・話し合いが不十分（話し合いをしていたら選手に悪影響）など ○表現：否定的な文末や語句 ・落胆・合意なき決定 など	1 5	・興味をもって取り組めるように、比較的最近にあった時事ニュースを教材として取り上げる。 ・既習事項である「事実の切り取られ方」を確認させて、この新聞記事では、どのような事実が切り取られているかを学習者全体の共通の確認事項としておく。 ・新聞記事は二紙準備しておく。 ・自分たちの「東京オリンピックマラソン会場変更」に対する評価が変わった理由を、新聞の語句、リード文、資料写真などにどのような工夫がなされているか調べさせる。 ・細かな表現部分（語句など）は指摘するのは難しいと思われるが、積極的に指摘させたい。また、新聞記事の筆者の主観やバイアスがかかっているところはないか考えさせていく。これらのことをワークシートに記述させる。
4. 個々で考えた分析を交流し、見方を広げ、深めていく。（班別学習） 5. 各班で話し合ったことをまとめ、発表し、クラス全体で見方を広げ、深め、新聞記事の読み方を一般化する。	1 5	・個々の意見を単純に集約するだけでなく、それぞれの評価や分析に対して、理由を明確にして交流できるようにする。 ・生徒たちが活動しやすいように分析の観点を明確にしておく。 ・班長に活発な話し合いが進むよう促す。なかなか充実した話し合いにならない場合には教師が机間指導しながらサポートする。 ・ホワイトボードに自分たちの考えをまとめる。 ・細かな表現（ことば）一つをとっても深い読みがなされることを確認させたい。
6. 別の視点で捉えた文章（会場変更に関する肯定的）を読んだ上で、新聞2紙の評価をする。 予想される生徒の反応 ・変更理由である暑さについて書かれてい	5	・自分の価値観で評価をしてみてもいいものとするが、メディアの特徴（限界）から考えた場合ではどのような評価がなされるかについても言及する。 A) 十分満足の生徒への発展的手立て メディアの特徴を確認させ、われわれがメディアに

いなんてずい。 ・切り捨てられる部分があるのがメディアの特徴ともいえるのではないかな。だからこれでいいと思う。		どのように接していく必要があるのかを考えさせる。 B) 十分満足な状況になるための補手的な手立て 会場変更で否定的な内容、表現を新聞記事から一つ示して新たな気づきを促すとともに、新聞に書かれていない内容があることの理由を考えさせる。 C) 概ね満足な状況になるための補手的な手立て 教科書に書かれていたメディアの特徴を示し、本時の学習活動と照らし合わせて理解をつなげる。
評価（○…おおむね満足できる状況 ◎…十分満足できる状況 評価の方法：ワークシート） ◎新聞や参考資料を読み、記事の内容を伝えるために適切な語句や資料等が使われているか分析することができるとともに、メディアの特徴を体験的に理解することができる。 ○新聞や参考資料を読み、記事の内容を伝えるための語句や資料等が使われていることを話し合いを通して確認することができるとともに、メディアの特徴を理解することができる。		
7. 本時の授業で学んだことを振り返る。	5	・今日の学習でわかったこと、あるいはメディアに触れるときに生かしていけそうなことを記述させる。 ・人の振り返りを聞いて、納得した発言についてメモしておくように伝える。

(2) 理科での実践

2月6日（木）上毛新聞に「5秒間で西之島噴火 噴煙高さ2700メートル」とあり、激しく噴火活動を繰り返す西之島の記事を紹介した。また、このように噴火することによって造山活動が起こり、今見えている山もこのようにしてできたことを伝えた。理科では火山によって山ができ、山の形はマグマの性質によって異なるということを学習した。その発展として、今起きている火山活動を紹介した。

また、新たな陸地ができていることにも触れ、マグマが噴き出して大地ができたという地球上での陸地形成もこれと似ていたことも紹介した。

(3) 上毛新聞ひろば欄「U22 私の声」への投稿

生徒が新聞に関心を持ってもらうために、今年度も日々の活動の中で書いた作文を投稿することを考え投稿を行い、多数の作文が掲載された。

4 感想と今後の課題

<成果>

- ・生徒の意見により、生徒が新聞に触れる機会を意図的に設定したことにより、複数の新聞を比較した会話が見られるようになった。
- ・各学年の教員がそれぞれの学年の生徒が書いた作文を、投稿するようになり、ひろば欄へ掲載が飛躍的に増えた。
- ・昼休みに廊下で新聞を広げている生徒が見られた。
- ・保護者や地区の方より掲載されたことを喜ぶ声がよせられた。

<課題>

- ・全校で新聞を活用した取り組みを考えられると良いと思った。
- ・委員会の活動などに生徒主体の活動として位置づけられると良いと思った。

親しみをもって新聞に接することができる環境づくり ～校内へのNIE実践の普及を通して～

婦恋村立婦恋中学校

I 実践の概要

本校は今年度、実践2年目となる。「親しみをもって新聞に接することができる環境づくり ～校内へのNIE実践の普及を通して～」を主題として掲げ、実践を行った。これは昨年度、国語科と社会科の授業を中心に行ってきた実践の枠を広げ、他教科や学級・学年・学校全体での活動を通して生徒が新聞に親しみ、新聞を通じた学びができる環境づくりを目指したものである。国語科と社会科での授業での実践は継続しつつ、生徒が「新聞を活用した学び」を学校生活の様々な場面で得られる取組を意識してきた。

新聞を活用した実践は、国語科については講師を招いての講義・「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募などを中心に行った。社会科においては、3年生の公民では学習内容と関わりのある記事を年間を通して紹介してきた。また、1・3年生では単元のまとめとしてはがき新聞作りを行い、関心のある事柄をまとめる活動をした。さらに今年度は英語科でも英字新聞をグループで協力して読む活動を取り入れた。

授業実践に加え、各学年の総合的な学習の時間や委員会の活動でも新聞作りの活動を取り入れてもらい、学校全体で積極的に新聞を読んだり、新聞にまとめたりする活動に力を注いできた。

2 実践の内容

(1) NIEコーナーの設置

今年度は9月から12月の4ヶ月間にわたり、朝日・毎日・上毛・日経・産経・東京の6社の新聞に加え、読売系列の英字新聞であるJapan Newsを加えた7紙を購読した。全校生徒が行き交う談話ホールに「NIEコーナー」を設け、図書委員会の生徒が新聞とコーナーの管理を務めた。その日の新聞はラックに挟み、過去の新聞はアーカイブとして棚に保管した。談話ホール内では自由に新聞を読むことができ、大きなニュース記事を掲示するコーナーも設けた。気になるニュースや新聞を手にする生徒の姿も見られ、新聞に親しみやすい空間を作り出すことができた。



(2) 教科の実践

〔国語科〕

1 学年では、上毛新聞社の NIE 担当・子安悟記者に
来校していただき、「新聞に親しもう」というテーマで
出前授業をしていただいた。日本が世界でも有数の新聞
大国であること、新聞の作り方、新聞の歴史、新聞の長
所と短所、新聞の読み方、ネットニュースを活用する注
意点など、新聞について幅広く話していただいた。

3 学年では、「いっしょに読もう！新聞コンクール」
への応募に際して、授業で新聞を利用した。ペアでお互
いの新聞記事と意見を読み合って交流し、感じたことを
伝え合う活動を行った。生徒自身が感心のある記事につ
いて話し合えたこともあり、多くの生徒が活発に話し合
っていた。



〔社会科〕

1 学年・3 学年の授業では、はがき新聞をつかったまとめ活動を行った。単元の内容に関わるテーマを
自分で設定し、さらに詳しく調べたり、まとめたりしてはがき新聞を作成し、廊下に掲示して生徒間で見
合えるようにした。一例を紹介すると、1 学年では世界の気候に関わる内容について、3 学年は第二次世
界大戦期の歴史などについて、それぞれテーマを設定してまとめる学習を行った。

3 学年の公民の授業では、新聞記事を積極的に取り入れた学習を行った。マスメディアと世論に関わる
学習については、消費増税に関わる新聞 3 社の記事を読み比べて、ニュースの取り上げ方の違いにつ
いて考えたり、社説を読み比べることでメディアリテラシーについて考えたりする活動を行った。また、3
学年の公民の学習では、政治記事、社会記事、経済記事を中心に、授業の内容や学習したことに関わりの
記事を積極的に活用してきた。



毎日新聞 2019.9.28



東京新聞 2019.9.28

比較に用いた記事



朝日新聞 2019.9.28

〔英語科〕

今年度は英字新聞 1 紙を購読していたので、英語の授業で活用した。3 学年の授業で、各グループに 1 日分の新聞記事を配布し、その中から関心のある記事を英語で要約する活動を行った。グループでは英文を読解する者、わからない単語を調べる者、要約の文章を考える者など、係を分担して話し合いながら活動を進めた。英語で書かれた記事の内容を英語で要約するのは、生徒にとって少し難易度の高いことであったが、普段新聞に触れる機会が少ない実態の中でニュースに触れる機会になったと同時に、日常で使われるネイティブの表現を読む良い機会となった。また、英語に苦手意識をもっている生徒も関心のある記事を見つけて、進んで話し合う姿が見られた。

（３）教科外の実践

〔総合的な学習の時間〕

各学年で総合的な学習の時間でのまとめツールとして新聞の作成を行った。1 学年は郷土学習、2 学年は職場体験、3 学年は修学旅行の新聞作りを行った。1 学年と 3 学年では、大きな新聞をグループでまとめ、2 学年は個人で 1 枚の新聞をつくり、授業参観の際にそれを用いて発表して掲示した。



職場体験の発表（2 年）



新聞作成の様子（3 年）



郷土学習の製作物（1 年）

〔委員会の活動〕

図書委員会ではN I Eコーナーの管理を行い、全校生徒が新聞を見たり読んだりする場作りに務めることができた。また、保健委員会では、はがき新聞を利用した啓発活動を行った。保健委員の生徒が情報モラル、メディアの正しい使い方や健康との関わりについてはがき新聞にまとめ、保健室前の廊下に掲示した。足を止めて読む生徒の姿も見られ、各生徒の作成したはがき新聞で効果的な啓発が行えた。

3 実践の成果と課題

○成果

- ・N I Eコーナーの設置によって、新聞に親しみやすい場作りをすることができたので、生徒が新聞を目に入れやすく、手に取りやすい環境を整えられた。
- ・職員間でのN I E実践テーマの共有を図り、英語科や総合的な学習の時間、委員会活動での新聞活用を積極的に取り入れることができ、生徒が新聞を通した学びを得られる場を広げられた。
- ・新聞作りの活動を通して、作成する記事の内容や資料を精選したり、文章をまとめて要約したりすることに生徒が慣れてきた。
- ・国語・社会・今現在の社会に目を向け、学習したことを関連付けて考えるきっかけとすることができた。
- ・作成した新聞を廊下などに掲示することで、学校全体で新聞を通した生徒間の情報共有の促進を図ることができた。

●課題

- ・新聞の購読が限られているため、年間を通して生徒が新聞に触れられる機会をつくりたい。購読期間以外にも、通信や授業、学活等で新聞を紹介する実践も行っていけるとよい。
- ・生徒個人を見ると、新聞を読もうとする意識が高まった生徒もいたが、学年や学校全体としての意識を高めたい。N I Eに関する情報やテーマを職員間で共有して実践していけるよう研修等で話し合っていきたい。
- ・図書委員会の活動でN I Eコーナーの管理を行えたが、生徒主体でN I Eを普及させる活動を考えさせられると良かった。N I E実践の生徒の組織をつくり、生徒が生徒に普及できる形をつくっていけるとさらによい。
- ・より生徒が新聞を手に取りやすいよう、各クラスにおける環境づくりができるといい。購読数が限られているので、検討しながら考えていけるとよい。

NIE 令和元年度の取組

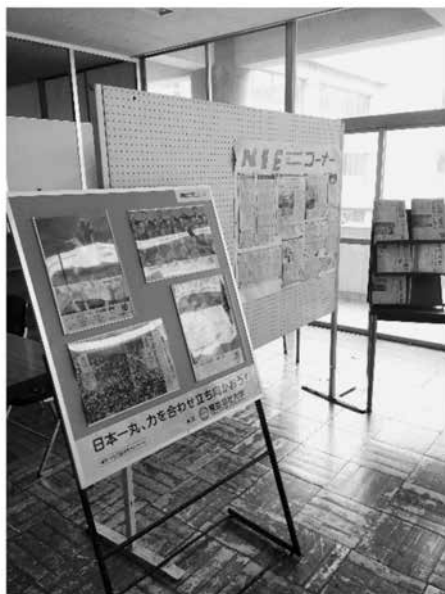
群馬県立伊勢崎高等学校

教諭

森 貴由紀

I. 本校の実践概要

伊勢崎高校はグローバルコミュニケーション科と普通科の2つの学科を持ち、1学年8クラスという県内でも最大規模の生徒数を有する学校である。グローバルコミュニケーション科では、実践的な英語運用能力の育成を目指し、国際交流の拠点校として海外からの訪問者や教育旅行生を受け入れ、交流を行っている。また、本校生徒が実際に小学校を訪問して児童に英語の楽しさを伝える活動も行っている。普通科では多様な進路がある中、自分の進路希望に適した



N I E コーナーを設置

学習に集中的に取り組めるカリキュラムが設定され、習熟度別の学習が実施されている。1年次は全クラス共通の教育課程で学び、2年次よりグローバルコミュニケーション科と普通科の文型・理型に分かれて学習を進める。

本校卒業生の進路は、概ね大学・短大への進学が7割、専門学校への進学が2割、就職・その他が1割となっている。日頃より新聞を読むことが習慣化している生徒は多くはないが、自分の進路実現に向けて必要に応じて新聞を活用する姿はみられる。

II. 新聞の置き場所や活用方法

本校は昨年よりN I E 実践校の指定を受け、今年度は2年目を迎えた。昨年は地歴科での活動が中心であったが、今年度はそれを他教科にも広げることが目標に計画を立てた。昨年に引き続き学校司書を中心に生徒が興味を引きそうな記事を切り抜き、模造紙に貼り掲示している。

毎日届く新聞は2・3年生が使用する玄関近くのスペースにラックを置き、生徒が自由に手に取れるようにした。また、過去の新聞は他教科の教員でも活用できるように新聞社ごとに保管した。進路指導の一環として、面接や論文の

指導を行う担当にも新聞の活用を伝えるようにしたため、生徒が過去の記事を探すために活用する姿が多く見られるようになった。



過去の記事を探す生徒

Ⅲ．実践内容

(1) 国語探究

授業実践は2年生文型クラス(4組21人、5組22人)で実施した。

1 新聞の社説を利用

① 語句の読み②語句の書き③語句の意味④略語(例:GSOMIA・COP12)の把握と理解⑤本文を読んで記事に小見出しをつける。

2 新聞の投稿欄(読者投稿のコーナー1日分 4～5人分の文章)

自分の興味関心に応じて1つ選び、その文章に対して自分の意見を書く。字数制限はなし、少なすぎる場合のみアドバイスして続きを書くように促そうと考えていたが、皆無であった。「課題を自分で選ぶ」という設定が生徒にとって「書きやすい」設定となったようである。

3 新聞の投稿欄(NIE活動をしている学校の生徒による文章)

「ランドセル使用の是非」や「高校野球の投球数制限」などの話題に対して、賛成と反対の立場で書かれた2人の高校生の文章を読み、自分は①どちらを②なぜ指示するのかを書く課題を課した。書き終わった後、提出をして教師からのアドバイスを受けるとともにペアでお互いの文章を読み合い、良いところと改善点を伝え合った。

4 新聞の記事(複数のゲーム依存に関する特集記事)

ゲーム依存についての記事を複数読み、

- ① なぜ問題となっているのか
- ② どういう人達が依存しているのか
- ③ ゲーム依存になるとどうになってしまうのか
- ④ どのような対策が現在なされているのか

を読み取って各自が文章にまとめた。それを基にして、「ゲーム依存を考える」

と題して各自が自分の考えを600字～800字の文章にまとめた。今回は文章化することで終了とせず、全員の前で発表することとした。

①～④までの内容に加え、自分の兄弟や自分自身を振り返って現状や課題、自分が考える対応策にまで言及する生徒もいるなど、今回の取り組みで「多くの問題を抱える現代社会の中で生きている自分」について初めて見つけ、考えることができたという生徒も多かった。

5 図書館を利用して、グラフや図表を用いた新聞記事を使った問題を作成した。司書の先生にご協力いただいて、図書館の広い机に2人ずつ座り、

① 2週間分4～5社の新聞から自分で
気になる記事を選び、

② 記事の文章やグラフ・図表を用い
て大問5題程度を作問した。

③ 語句に関しても、記事の中から読み・
書きの問題を5～10問ほど各自で
作問した。

④ 作問後、お互いに問題を解き合い生徒
主体で答え合わせや解説を行った。



答え合わせをする生徒

「五」 次の文章を読み、以下の問に答えなさい。

「読んで読む」が社会を豊かに 「A」

読書の楽しみを分かち合える貴重な取り組みと言えるだろう。人前で推薦する本の魅力を語り、最も読みたくなった本を全員の投票で決める。そんな書評合戦が「A」だ。

先月、高校生の全国大会が開かれた。埼玉県の高橋さん、印南舞さんは手話通訳士を揃えた小説取り上げ、「障害をテーマにした作品」と聞くと、どんなイメージを描くでしょうか」と語りかけた。5分間の本の紹介が終わると、213分間の①シツシツと移る。全ての発表が終わった後に②デジデジの音も含めた参加者全員で投票を行う。印南さんの紹介した本が最多票を集め、「チャンピオン」になった。参加者は、発表者を通して意外な本と出会う。本の紹介を聞きながら、発表者の思いや人柄に触れていく。「A」は本と人、人と人との結びつけるところに③醍醐味がある。

中学生や大学生の大会も行われている。地域のコミニティセンターなどでは、40歳以上限定といったイベントも見られる。取り上げる本を恋愛小説やマンガ本に限定する④モリオしも可能だ。様々な形で、本のテーマやジャンルを自由に選べることも魅力の一つだろう。

「A」は、学校が指定する課題図書とは異なり、() ところが特徴がある。自発的に本を探す過程で読書の(B)は広がる。若者の本(C)が指摘されている。

「A」を通して本に親しむ機会が増えるという。

本の面白さを他の人に理解してもらうには、まず、作品に込められた著者の思いをくみ取るなど、深い(D)力が必要とされる。加えて、作品の魅力を分かりやすく伝える(E)力も必要となる。(D)力や(E)力は、日本の学校教育の課題とされてきた。「A」の手法を授業に取り入れている学校も少なくない。子供たちが主体的に学ぶ手がかりになることが期待される。

人前で説明するために⑤30秒の準備し、説得力ある言葉でスピーチした経験は、社会に出てから、取引先に新商品などを提案する場面でも役立つのではないか。元々、このゲームは工学研究者の谷口忠大氏が考案した。本探しを通じて知識を楽しく研究仲間と共有することが目的だった。職場の同僚や友人同士で気軽に「A」を楽しめれば、豊かな時間が広がる。

読売新聞令和2年2月16日(日)

問一 「A」に適切な言葉をカタカナ七字で答えなさい。

問二 ①～④の傍線部の漢字にはひらがなで読みを、ひらがなは漢字で答えなさい。

問三 (B)・(C)にふさわしい漢字をそれぞれ一字で答えなさい。

問四 (D)・(E)にふさわしい熟語をそれぞれ漢字二字で答えなさい。

問五 本文を参考にして、(X)に「A」の特徴を考えて書きなさい。

条件(1) 三〇字以上四〇字未満で書くこと

条件(2) 書き出しは「自分が」から始めること。(字数を含む)

教員が作成した新聞記事を基とした問題

読売新聞 令和2年2月16日(日)を使用

（２）実践のまとめ

生徒４３人に関して、４３家庭中で新聞を取っているのは７家庭であった。うち１家庭は高校生新聞も取っており、その生徒の持ってきた高校生新聞に興味がある生徒も多くいた。

今年度のまとめとしてこの取り組みを設定したが、「生徒に新聞に触れる機会をもたせたい」という密かな企みでもあった。結果として、記事を選ぶ際に、新聞に端から端まで目を通し、自分の興味がある記事を見つけては（それが必ずしも今回の課題に直結せずとも）頁をめくる手を止め、記事を食い入るように熟読し、自分にとっての必要度や興味関心に応じた読みをそれぞれの生徒ができていた。

課題としては、普段、新聞が身近になく、新聞を読む経験がない生徒も多いので、記事の最後に（関連記事３面、１５面）と書かれていてもそこまで関連して記事を見つけられずに読み終えてしまう生徒が多かったことが挙げられる。スマホやネットでニュースをチェックする生徒も多くいるようであるが、入手するのは自分の興味関心があるものだけに限った間口の狭い情報であり、広く社会に向かってアンテナを張ることが生徒にとって難しい現状なのだと感じた。今回の課題に取り組みながら、新聞に興味を持ち、「家族に『新聞を取って欲しい』と言ったら『ダメ』と断られた」という生徒もいた。だからこそ、複数の新聞社の新聞が身近にあるという環境を作っていただけたことは生徒にとって大変有り難いことであった。

Ⅳ．実践の感想と今後の課題

N I E の取組が２年目ということもあり、幅広い教科で実践が行われた。報告した国語探究以外に、政治・経済、現代社会、地理Ｂ、探究（総合）で活用された。社説の読み比べを行ったり、世界の食文化について生徒自身で調べ学習をしたりと、主体的な学びに新聞の活用が有用であることがわかったと同時に、新聞があって当たり前であった教師の世代に比べ、現在は意図的に新聞と関わりを持つ機会をこちら側から設定することが現在の高校生には必要であることを再認識した。

【これまでの実践校】

- ◆2004年度 笠懸中、万場高、創世中等教育、昭和南小、高崎大類小
- ◆2005年度 万場高、創世中等教育、昭和南小、高崎大類小
- ◆2006年度 伊勢崎境剛志小、伊勢崎境西中、太田東中、西邑楽高、富岡高瀬小、高崎寺尾小、前橋新田小、前橋一中
- ◆2007年度 富岡高瀬小、高崎寺尾小、前橋新田小、前橋一中、高崎西部小、太田沢野中央小、太田生品中、沼田小
- ◆2008年度 太田沢野中央小、太田生品中、沼田小、伊勢崎四中、館林二中、太田女子高、尾瀬高、館林高定時制
- ◆2009年度 太田生品中、伊勢崎四中、館林二中、太田女子高、尾瀬高、板倉北小、前橋元総社中、太田高
- ◆2010年度 太田生品中、板倉北小、前橋元総社中、太田高、桐生新里北小、前橋大利根小、伊勢崎殖蓮中、勢多農林高
- ◆2011年度 板倉北小、新里北小、前橋大利根小、伊勢崎殖蓮中、勢多農林高、高崎城東小、太田西中、太田強戸中
- ◆2012年度 前橋原小、高崎片岡小、伊勢崎豊受小、千代田東小、桐生広沢中、太田西中、太田強戸中、館林商工高
- ◆2013年度 前橋原小、伊勢崎豊受小、千代田東小、高崎高松中、桐生広沢中、太田西中、太田強戸中、昭和中、館林商工高、群馬法科ビジネス専門学校、大泉保育福祉専門学校
- ◆2014年度 群馬大附属小、伊勢崎豊受小、高崎高松中、太田西中、沼田南中、昭和中、藤岡中央高、西邑楽高、館林商工高、群馬法科ビジネス専門学校、大泉保育福祉専門学校
- ◆2015年度 群馬大附属小、高崎南小、桐生川内小、太田西中、沼田南中、館林四中、甘楽二中、藤岡中央高、西邑楽高
- ◆2016年度 高崎南小、桐生川内小、昭和東小、館林四中、甘楽中、前橋富士見中、高崎一中、沼田南中、太田西中、西邑楽高
- ◆2017年度 昭和東小、沼田利南東小、高崎新高尾小、桐生相生中、太田東中、前橋富士見中、高崎第一中、沼田沼田南中、尾瀬高
- ◆2018年度 高崎新高尾小、沼田利南東小、太田東中、桐生相生中、高崎大類中、嬬恋中、沼田薄根中、伊勢崎高、尾瀬高

2020年7月15日発行

2019（令和元）年度

群馬県N I E実践報告書

編 集 群馬県N I E推進協議会事務局
発行者 群馬県N I E推進協議会
事務局 〒371-8666 前橋市古市町 1-50-21
上毛新聞社内
電話 027-254-9933（編集局代表）
